トラベルキャリアと阻害要因が中高年の旅行動機に与える影響
―東京都立大学　プレミアム・カレッジ生の調査から―

The effect of travel careers and constraints on travel motivations of middle-aged and older adults
－A survey of Premium College students in Tokyo Metropolitan University's Premium college－

鈴木美樹*、倉田陽平**
SUZUKI Miki*, KURATA Yohei**

トラベルキャリアと中高年層の阻害要因が中高年層の旅行動機に与える影響について東京都立大学主催の「プレミアム・カレッジ」に通う 51～76 歳を対象に、海外旅行に関して選択回答式 web アンケートを実施した。その結果、旅行回数が増えると旅行の動機が高次化するという Pearce の Travel Career Ladder の考え方とは異なり、本研究では、阻害要因の影響も含め、動機の高次化の傾向は見られなかった。むしろ低次とされる「生理的欲求」「安全欲求」動機を中高年層はより重要視することがわかった。

キーワード：トラベルキャリア（travel careers）、阻害要因（constraints ,inhibiting factors）、旅行動機（travel motivation）

１．　本研究の背景と目的

日本では 50 歳以上の人口割合が増えている。2024 年頃には 50 歳以上が 50%を超えるという推計があり [1)]、中高年層をターゲットとした旅行の促進が求められる。一方で中高年層の旅行実施率が他の年代と比べて必ずしも高くないことを示すデータもある。[2)]

中高年層のさらなる旅行促進のため、彼らの旅行経験、現在の旅行動機、および両者の関係を理解することは実学的価値があると考えられる。

また、旅行経験と動機がどのように関係しうるかは、後述する Pearce ら（1983, 1988, 1990）の Travel Career Ladder（略して TCL という）の理論を問う学術的意味でも興味深いテーマと考えられる。

TCL では、旅行の動機は旅行回数が多くなると、自己実現などを求めるレベルへと高次化するとされる。この考え方に照らすと、一般に他の年齢層よりも旅行経験（回数）を積んでいる中高年層の旅行動機もまた旅行経験の影響を受けて高次化している可能性が考えられる。その一方で、体力など中高年層の旅行を阻害する特有の要因も予想され、彼らが生理的欲求、安全欲求などの低次の欲求を旅行に求める可能性もある。

これらをふまえ、本研究では日本の中高年層の動機の変化と旅行経験（回数）及び阻害要因の関係を明らかにすることを目的とする。

（本研究では Pearce の TCL の旅行動機が Maslow の 5 段階欲求に沿って議論されたのを受けて、5 段階欲求を動機におきかえて取り扱う。）

２．　先行研究

旅行動機と旅行経験の関係を示す学術的理論は 1980 年代にさかのぼる。Maslow (1973,1981[3)],1987[4)])は欲求の階層理論（生理的欲求、安全欲求、所属と愛の欲求、承認欲求、自己実現欲求）に基づいて低次な欲求から出発してそれが満たされると欲求が高次化していくとした。（図 1-1）

Pearce，Caltabiano (1983)[5)], Pearce (1988,1990)は Maslow の理論に倣って、旅行の動機も旅行経験（回数）が増えると、低次なものから高次な動機に向かって進んでいくと考えた。この理論を Travel Career Ladder（TCL）という。

＊東京都立大学 大学院 都市環境科学研究科　suzuki-miki2@ed.tmu.ac.jp
＊＊東京都立大学 大学院 都市環境科学研究科　ykurata@tmu.ac.jp

TCL が示す旅行経験と旅行動機の高次化の関係に関しては異論が少なからず呈されてきた。Ryan ら(1998)[6]は TCL 研究の an appraisal(鑑定)を行いさまざまな研究結果から理論が曖昧であることを示した。

Pearce, Lee (2005)[7]は、旅行回数が多い人と少ない人の動機がどう違うのかを検証し、経験豊富な旅行者ほど「ホストサイトとの関わり（異文化体験)」、「自然との関わり」を重視することを明らかにした。

このような流れの中で TCL の理論の見直しが行われ、Pearce は動機を中核層、中間層、外層の３層に分類し Travel Career Pattern (TCP)[8]という理論も示した。

日本人に関しては、観光動機などに関する研究は盛んにおこなわれている。佐々木（1996[9],2000,2005）は、旅行動機は①逃避やリラックスに関わる「緊張解消」、②レクリエーションや楽しみに関 わる「娯楽追求」、③人間関係の拡大や強化に関わる「関係強化」、④異文化への理解や知識に関わる「知識増進」、⑤自尊心の向上や自己成長に関わる「自己拡大」と Maslow の 5 段階欲求に近い5次元に集約できるとした。林ら(2004,2008[10])も自己拡大、文化見聞・自然体験、現地交流、健康回復など類似の動機を抽出している。布施ら（2005)[11]は、旅行回数とトラベルスキルには強い相関がないこと、質的側面がトラベルスキルに影響を及ぼしているとした。

一方、旅行経験と旅行動機の関係や日本人中高年層の TCL の理論の検証は十分にされていないようである。

また Maslow のアプローチは人生における高次化理論であるのに対して TCL は旅行に焦点を当てたものになっている。すべてが相関するわけではなく、動機の変化は複雑な要素がからみあっている。

図 1-1　Maslow の 5 段階欲求

中高年層の旅行動機の変化の説明要因として、旅行経験の蓄積だけではなく、旅行阻害要因も無視できない。阻害要因については、旅行の動機を考える際には、「旅行を思いとどまらせるもの」としてあわせて検討した方がよいと考えた。中高年時には健康問題などが旅行の阻害要因となる[12]ので、衛生・安全への動機が高まるのではないかと考え、先行研究にもあたった。

Crawford 、 Godbey（1987）[13]は旅行の阻害要因を個人的、対人的、構造的要因に分類して分析を行った。中村ら（2010,2013[14]),林（2011）は阻害要因と動機などとの関係について分析を行った。阻害要因の知覚レベルは、動機づけのレベルに対して負に影響する、同居配偶者の不在は、中高年層にとっては 大きな阻害要因になるとしている。

３．　調査対象者

調査対象者は、東京都立大学主催の「プレミアム・カレッジ」に通う 51～76 歳で、平均約 63 歳の方々。「プレミアム・カレッジ」とは、50 歳以上の方を対象とした講座である。東京をフィールドに豊富な資源を最大限活用したカリキュラムとなっている。入学にあたっては、小論文と面接の選考がある。一般的な中高年層に比べ向学心・通学意欲のあるアクティブな方々であり調査対象者に偏りはあるため結果の解釈には注意が必要である。

４．調査概要

web アンケートを 80 人にメールにて送付し、45 人から回答を得た。

表 1　回答者の年齢・性別・学校歴

年齢	性別	学校歴
50 代 13 人	男性	高等学校卒業　5 人
60 代 26 人	22 人	短大専門学校卒業 11 人
70 代 6 人	女性	大学卒業　24 人
	23 人	大学院卒業 5 人
計 45 人		

過去の旅行の代表として「過去一番よかった海外旅行」の動機と、その後旅行回数を重ねた中高年時の現在「今後行きたい海外旅行」の動機を阻害要因と合わせて調査した。

※コロナ禍による旅行動機や旅行阻害要因への影響をなるべく排除するためアンケート内で「コロナの影響や感染症の影響はなく、平常時という想定でお答えください」と明示した。

(1)調査期間　2020 年 8 月 21 日～9 月 10 日

(2)回答者プロフィール

1)60 代中心、高学歴者が多い。

2)海外旅行回数が多く海外旅行にお金を使える経済的に豊かな人が多い。1～500 回の海外旅行の経験がある。50 回以上も 13 人。年間に使える金額も 11～30 万円が一番多く 19 人(42.2%)である。

５．調査結果：全体傾向

（１）「過去一番よかった海外旅行」と「今後行きたい海外旅行」の動機比較

Maslow の 5 段階欲求説を動機に対応させ、各動機の当てはまりの強さを「当てはまる」から「全く当てはまらない」の 5 段階で聞いた。

「過去一番よかった海外旅行」と「今後行きたい海外旅行」の動機の変化は、高次とされる動機「自分を成長させたい」「自尊心を満たしたい」の「当てはまる」の数値はそれぞれ過去 24%→今後 33%（＋9%）、過去 7%→今後 9%(＋2%)と高くなっている。一方低次の動機とされる「安全に過ごしたい」「衛生的に快適でありたい」も過去 49%→今後 56%(＋7%)、過去 40%→今後 53%(＋13%)と高くなっている。阻害要因などの影響を受け高次のみに動機が強まらないことが考えられる。

過去の動機と旅行回数が増えた段階の中高年時現在の動機に関して有意差があるか対応のある t 検定を行った。高次の動機とした「自分を成長させたい」「自尊心を満たしたい」は%の値としては旅行回数の多くなった中高年時の方が当てはまりへの評価が高いが、有意差は見られなかった。一方「衛生的に快適でありたい」は中高年時の動機において当てはまりの強さへの評価が有意に高かった。

（２） 動機の変化に影響を与えるもの

旅行の動機の変化に影響を与えるものとして、「旅行回数」「ライフサイクル」「年齢」の影響度について調査したところ、ライフサイクルの影響を「とても」とする人が 27%と一番多かった。旅行回数の影響を「とてもある」とした人と「全くない」とした人は 20 %と同数で意見が分かれた。旅行回数の動機への影響は人により違うことが読み取れる。

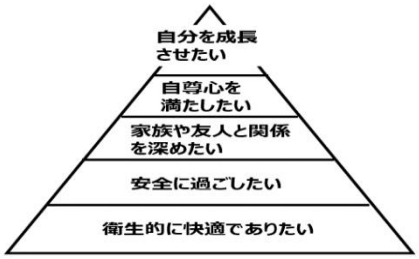

図 1-2　5 段階欲求を動機項目としたもの

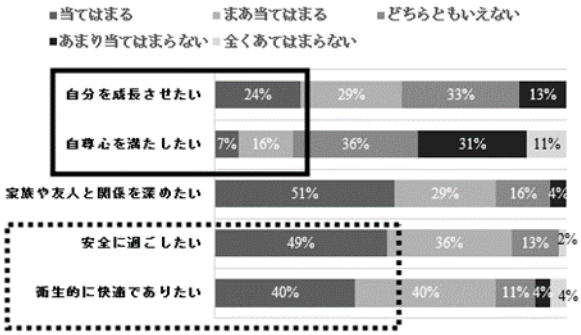

図 2-1 過去一番よかった海外旅行の動機

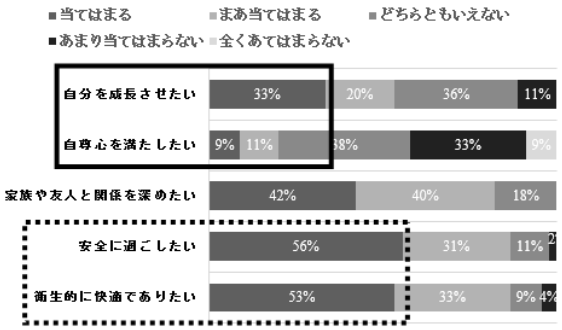

図 2-2　今後行きたい海外旅行の動機

表 2　対応のある t 検定結果

※P＜0.05　※※P＜0.01

Maslow型 n=45	過去の動機		中高年時現在の動機		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	p値
自己実現欲求：自分を成長させたい	2.36	1.00	2.24	1.05	0.482
承認欲求：自尊心を満たしたい	3.24	1.07	3.22	1.06	0.860
所属と愛の欲求：家族や友人と関係を深めたい	1.73	0.89	1.76	0.74	0.860
安全欲求：安全に過ごしたい	1.71	0.87	1.60	0.78	0.359
生理的欲求：衛生的に快適でありたい	1.93	1.05	1.64	0.83	0.036 ※

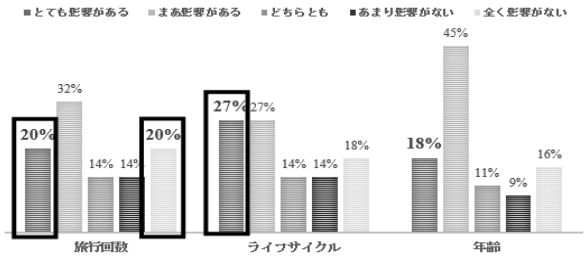

図 3 海外旅行の動機の変化に影響を与えるもの

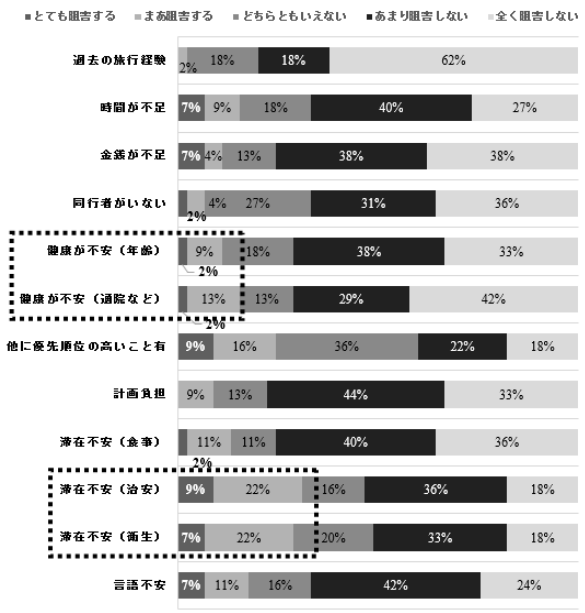

図 4　今後行きたい海外旅行の阻害要因

（３）　阻害要因

Crawford , Godbey（1987）の観点、中村（2013）の項目をベースに中高年に発生しそうな阻害要因を確認した。プレミアム・カレッジ生の中では、「とても阻害する」「まあ阻害する」との回答はほとんどなく健康不安も含めて阻害の認識は低い。その中で、滞在不安（治安）・滞在不安（衛生）がそれぞれ 31%・29%人と 1、2 番目に高い。Maslow 型動機で低次とされる「安全に過ごしたい」「衛生的に快適でありたい」とも一致しており、これらの阻害要因は、中高年時の旅行動機と相関があると考えられる。

６．　調査結果：<u>旅行回数別</u>傾向

調査対象者を海外旅行の旅行回数に応じて比較的均等になるように 3 群に分けた。具体的には、少回数群（1～10 回：16 人）、中回数群（11～49 回：16 人）、多回数群（50 回以上：13 人）とし、動機と阻害要因を 5 段階評価の平均値で比較した。

動機は、図 2-1 と同じ動機項目を「当てはまる」を 5～「全く当てはまらない」を 1 とする 5 段階の平均値で比較し、阻害要因は、「とても阻害する」を 5～「全く阻害しない」を 1 とする 5 段階の平均値で比較した。

（１）旅行回数と「過去一番よかった海外旅行」と「今後行きたい海外旅行」の動機比較

多回数の人ほど、「過去一番よかった海外旅行」で「衛生的に快適でありたい」の動機が高い。「過去一番よかった海外旅行」も「今後行きたい海外旅行」も「自分を成長させたい」の動機は回数別の３カテゴリーの中で低くなっている。

次に、多回数の人と少回数の人とで「過去一番よかった海外旅行」の動機と「今後行きたい海外旅行」の動機の「当てはまる」の度合いに有意な差があるのかを見るためにマンホイットニーのU検定を行った。結果、どちらも有意差は見られなかった。旅行回数別の検証からも、旅行回数の多い人ほど動機が高次化するとは必ずしも言えない。

表 3　回答者の旅行回数と人数

少回数の人数	中回数の人数	多回数の人数
1 回 2 人	11～20 回 7 人	50～99 回 4 人
2～10 回 14 人	21～49 回 9 人	100～500 回 9 人
計 16 人	計 16 人	計 13 人

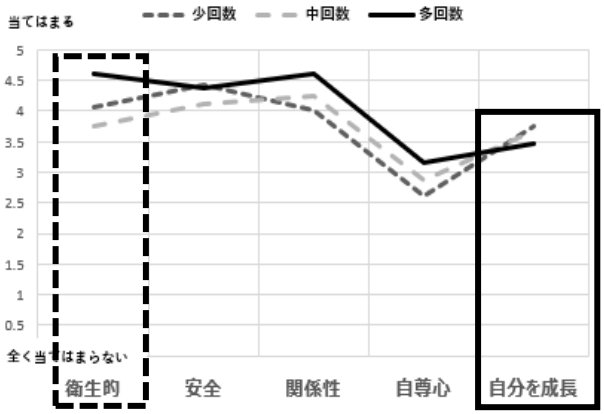

図 5-1 旅行回数別 過去一番よかった海外旅行の動機

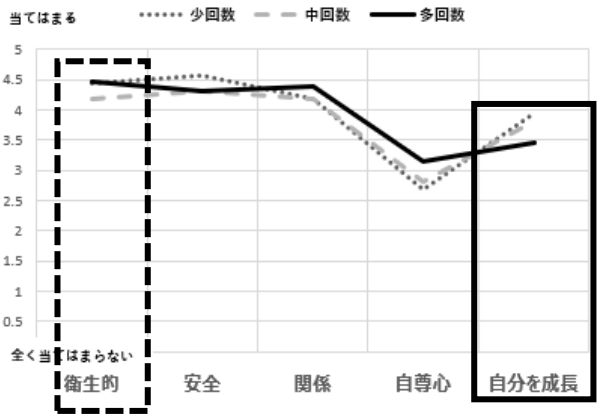

図 5-2 旅行回数別 今後行きたい海外旅行の動機

表 4 過去旅行の動機マンホイットニーの U 検定

※　p値が0.05未満（p＜0.05未満）　※※p値が0.01未満（p＜0.01未満）

Maslow型　n=少回数16,多回数13	旅行が少回数の人		旅行が多回数の人		旅行が少回数の人		旅行が多回数の人		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	中央値	四分範囲	中央値	四分範囲	p値
自己実現欲求：自分を成長させたい	2.25	0.93	2.54	0.97	2	1.8-3	3	2-3	**0.456**
承認欲求：自尊心を満たしたい	3.56	0.96	2.85	0.99	3.5	3-4	3	2-4	**0.096**
所属と愛の欲求：家族や友人と関係を深めたい	2.00	1.03	1.38	0.65	2	1-2.3	1	1-2	**0.105**
安全欲求：安全に過ごしたい	1.56	0.63	1.62	0.77	1.5	1-2	1	1-2	**0.965**
生理的欲求：衛生的に快適でありたい	1.94	0.77	1.38	0.65	2	1.8-2	1	1-2	**0.051**

表 5 中高年時の動機マンホイットニーの U 検定

※　p値が0.05未満（p＜0.05未満）　※※p値が0.01未満（p＜0.01未満）

Maslow型　n=少回数16,多回数13	旅行が少回数の人		旅行が多回数の人		旅行が少回数の人		旅行が多回数の人		
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差	中央値	四分範囲	中央値	四分範囲	p値
自己実現欲求：自分を成長させたい	2.06	0.85	2.54	1.13	2	1-3	3	1-3	**0.203**
承認欲求：自尊心を満たしたい	3.44	1.09	2.85	0.99	4	3-4	3	3-3	**0.130**
所属と愛の欲求：家族や友人と関係を深めたい	1.81	0.66	1.62	0.77	2	1-2	1	1-2	**0.417**
安全欲求：安全に過ごしたい	1.44	0.89	1.69	0.75	1	1-1.3	2	1-2	**0.254**
生理的欲求：衛生的に快適でありたい	1.56	0.81	1.54	0.78	1	1-2	1	1-2	**0.930**

（2）旅行回数と阻害要因

旅行回数が少ない人の方が阻害要因の認知度が高い傾向にある。特に「現地の言語・コミュニケーションへの不安（言語不安）」に対する阻害認識が多回数の人の 5 段階評価で平均が 2.15 であるのに対して、3.25 と高い。滞在不安（衛生）や健康が不安（通院、年齢）なども少回数の人の阻害の認識は高い。

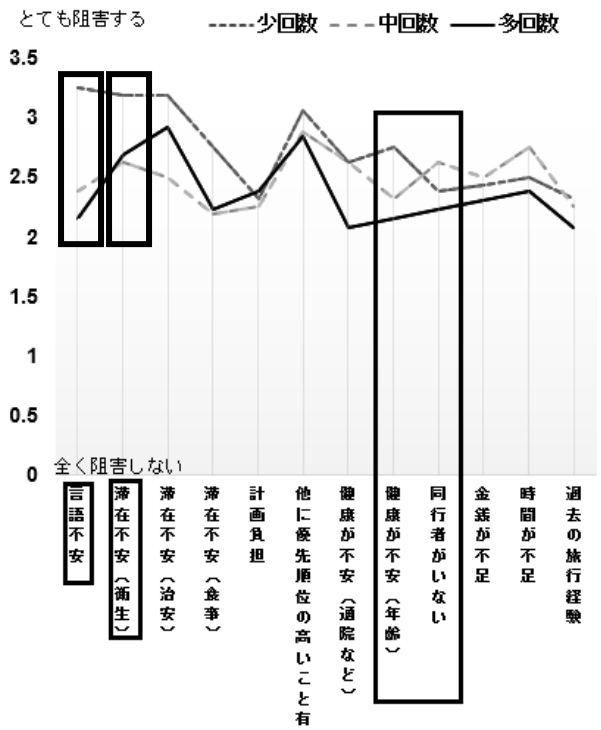

図 7 旅行回数別　現在の阻害要因

7．考察・結論

旅行回数が多くなると動機は Maslow 的に高次化するのかに関して 3 つの観点から考察する。

（1）「過去一番よかった海外旅行」と中高年時の現在の「今後行きたい海外旅行」の動機比較からの検証

web アンケート結果からは、全体傾向として中高年時の動機の方が「自分を成長させたい」の「当てはまる」の数値が高かったが、検定結果として有意差は見られなかった。

TCL では、動機は「衛生」「安全」といった低次の欲求から高次に向けて進むとしたが、本調査では、旅行に関しては旅行回数や年齢が上がるほど、より「安全」「衛生」を重要視するという逆方向の結果となった。検定でも「衛生的に快適でありたい」の項目で旅行回数の多くなった中高年時に高くなるという点で有意差が確認できた。

旅行回数別の調査結果からも旅行回数の多い人の動機が高次化していることは導けなかった。

（2）旅行の動機に影響を与えるもの（旅行回数、ライフサイクル、年齢）の観点から検証

旅行回数よりもライフサイクルの方が動機の変化への影響があると回答した人が多かった。旅行回数の影響に関しては、意見が分かれたことからも回数による一律の動機への影響がないことが想定される。

（３）阻害要因の観点から検証

今回の調査対象者は阻害要因を感じている人は総じて少なかったが、滞在不安（治安）、滞在不安（衛生）で比較的高い数値になった。こういた阻害要因の認識が、Maslow の 5 段階欲求では低次とされる「安全欲求」「生理的欲求」に関わる動機を旅行回数の増えた中高年時により重視することにつながっていると考えられる。また旅行回数の少ない人で多くの項目で阻害の認識が高いことがわかった。阻害要因の認識と旅行回数はある程度相関があると考えられる。

3 つの観点から検証したが、旅行回数が増えることによって、Maslow 的な動機が高次化することは導けなかった。むしろ阻害要因の影響などを受けて、旅行回数の増えた中高年時に低次の動機の方向に向かうという結果となった。

本調査では、コロナの影響のない平常時の想定での回答を求めたが、中高年層の方々のこういった意識がさらに高まっていくこと考えられる。コロナ禍を受け、中高年の観光促進においては今後さらに重要な観点になると考えられる。「生理的欲求」「安全欲求」に対する具体的な施策などを丁寧に訴求していくことが阻害要因の認識を低減させ安心感を高め、旅行を促進していくことにつながると考えられる。

８． 今後の研究課題

今回は「プレミアム・カレッジ」というという学ぶ意欲や生活にゆとりのある中高年層への調査からの考察となった。こういった層の動機の高次化については検証ができたと考えられる。一般的な中高年層に広げての調査で差がみられるかについては、さらなる検証が必要である。

また今回は Maslow の 5 段階欲求に対応した動機での調査結果のみとしたが、他の高次化に紐づくような動機にも広げて検証していくことが考えられる。

謝辞：調査にご協力いただきました「プレミアム・カレッジ」のみなさまや事務局のみなさま、研究のフレームにご助言をいただきました直井岳人先生（現兵庫県立芸術文化観光専門職大学）に心から感謝申し上げます。

【参考文献】

1) 国立社会保障・人口問題研究所、日本の将来推計人口（平成 29 年推計） http://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp_zenkoku2017.asp , 2021/03/06
2) じゃらんリサーチセンター（2020）,じゃらん宿泊旅行調査, https://jrc.jalan.net/news/2020/07/16/3469/,2021/03/06
3) A.H.マスロー（1981）創造的人間　宗教・価値・至高経験,誠信書房　P128-135,　P157-179
4) A.H.マズロー(1987)人間性の心理学　モチベーションとパーソナリティー, 産業能率大学出版部 P55-155
5) Philip.P.and Caltabiano.M.(1983) "Inferring Travel Motivation from Travelers Experiences." Journal or Travel Research, 22(2), pp16-20
6) ChrisRyan(1998) Travel career ladder An Appraisal, Annals of Tourism Reserch,Vol25,Issue4, Pages 936-957
7) Philip.P. and LEE.U. (2005) : "Developing the Travel Career Approach to Tourist Motivation" , Journal or Travel Research, 43(3),pp226-237
8) Philip.Pearce. Tourist Behaviour (2019) , Edward Elgar Pub,pp50-85
9) 佐々木土師二(1996) 旅行者モチベーション研究の展望「旅行者行動の心理学」に向けて（２）関西大学社会学部紀要, 28(2): 27～68
10) 林 幸史, 藤原 武弘(2008) 訪問地域、旅行形態、年齢別にみた日本人海外旅行者の観光動機, The Japanese Journal of Experimental Social Psychology,Vol.48,No.1,17-31 実験社会心理学研究 48(1)
11) 布施光 代 ・難波 久 美 子・小 平英 志・久木 山健一(2005) トラベル・ス キルとトラベ ル・キ ャ リアとの関連, 観 光研 究 17(1) PP1-8
12) JTB 総合研究所 2016 年第 9 号シニアのライフスタイルと旅行に関する調査　レジャーやお出かけの頻度が減った理由
13) LAYMORE, GODBEY, CRAWFORD ら,NATURE AND PROCESS OF LEISURE CONSTRAINTS - AN EMPIRICAL-TEST, LEISURE SCIENCES 巻: 15 号: 2 ページ: 99-113 APR-JUN 1993
14) 中村哲(2013)　海外旅行の阻害要因の実証分析, 玉川大学観光学部紀要第 1 号, 1―22